

2020年「胃と腸」賞は入口陽介氏ら 「スキルス胃癌のX線診断—4型胃癌の年次推移、 形態学的・病理組織学的検討」(55巻6号)が受賞

2021年9月15日(水)、ウェビナー形式で開催された早期胃癌研究会にて、2020年「胃と腸」賞の授賞式が行われ、入口陽介氏(東京都がん検診センター消化器内科)らが発表した「スキルス胃癌のX線診断—4型胃癌の年次推移、形態学的・病理組織学的検討」(「胃と腸」55巻6号:779-793頁)が受賞した。

受賞者代表として入口氏が紹介された。続いて、「胃と腸」編集委員長の松本主之氏(岩手医科大学医学部内科学講座消化器内科消化管分野)より祝辞とともに、選考過程について述べられた。

「胃と腸」賞は、その年に「胃と腸」誌に掲載された論文の中から、特に消化管の形態診断学・治療の進歩と普及および病態解明に寄与した優れた研究であり、原則として原著形式の論文に対して贈られる。今回は対象論文202本について、「胃と腸」編集委員会で厳正な審査を行い、決定した。

今回の受賞論文は肉眼型別に胃癌の発生割合を調査し、4型胃癌のタイプ別に臨床病理学的特徴を報告したものである。調査の結果、進行胃癌における肉眼型別の発生数の年次推移について、全国集計と施設内93例を比較し、どちらも減少傾向であったと報告している。また、4型胃癌を原発巣の占拠部位別に胃底腺型、腺境界型、幽門腺型に分類し、2007年度を境に前期45例、後期48例に分けて検討した結果、後述の3点がわかったと報告している。①胃底腺型は前後期ともに原発巣の大きさが 25cm^2 以下で陥凹は深く組織型は未分化型腺癌が多かったこと、②腺境界型は前後期ともに原発巣の大きさが 50cm^2 以上で陥凹は浅かったが、後期では組織混在型の割合が増加していたこと、③幽門腺型は原発巣の大きさに比較して粘膜下層以深の面積は大きくなく、前後期ともに組織混在型が約30%に認められたこと、の3点である。加えて、93例の*H. pylori*感染状態も検討しており、前期はすべて現感染であったが、後期では現感染42例、未感染2例(胃底腺型2例)、除菌後4例(胃底腺型1例、腺境界型2例、幽門腺型1例)であったと報告している。以上の結果から、スキルス胃癌、4型進行胃癌の正確な診断のためには、原発巣の部位・背景粘膜の相違による形態学的・病理組織学的特徴を十分に理解して、スクリーニング、精密検査を行うことが重要であると結



▲ 2020年「胃と腸」賞を受賞した入口陽介氏

論付けている。

受賞者挨拶で入口氏は“この度は素晴らしい歴史と伝統のある「胃と腸」賞を受賞させていただき、身に余る光栄と感謝しております。選考にあたられました編集委員長の松本主之先生、編集委員の先生方、医学書院の皆様にご心より御礼申し上げます。今回、受賞できましたのも、早期胃癌研究会に継続して参加させていただいた賜物と思っております。この研究会は画像診断学の最高の研究会であります。参加の機会を与えていただきました歴代の運営委員長、それから運営委員、読影委員の先生方に感謝申し上げます。また、一番には画像診断の面白さをご指導いただきました恩師の細井董三先生、私を拾っていただきました藤田力也先生、それから毎日病理組織像を見ていただいています山村彰彦先生、そしてなんといつても共に議論してきました多摩総合医療センター、東京都がん検診センターの仲間たちに感謝を申し上げたいと思います。この度は誠にありがとうございました”と述べた。

その後、入口氏から受賞論文のレビューがなされ、最後にWeb上で視聴していた参加者から改めて称賛の拍手が送られ、授賞式は終了した。